

大好評
アカデミー出版の

超翻訳

私は別人

シドニー・シエルダン 作

下巻



**SIDNEY
SHELDON**

**A STRANGER
IN
THE MIRROR**

~~~~~

A STRANGER IN THE MIRROR  
 Copyright © 1988 by the Sheldon Literary Trust  
 Japanese translation rights arranged  
 with John Farquharson Ltd through  
 The English Agency (Japan) Ltd.  
 All rights reserved including the rights  
 of reproduction in whole or in part in any form.

# 私は別人 (下)

|             |       |
|-------------|-------|
| 一九九三年十月十日   | 第一刷発行 |
| 一九九三年十月二十日  | 第二刷発行 |
| 一九九三年十一月一日  | 第三刷発行 |
| 一九九三年十一月十日  | 第四刷発行 |
| 一九九三年十一月二十日 | 第五刷発行 |
| 一九九三年十二月一日  | 第六刷発行 |
| 一九九三年十二月十日  | 第七刷発行 |

著者 シドニイ・シェルダン

訳者 天馬龍行  
 紀 泰隆

発行者 益子邦夫  
 発行所 (株)アカデミー出版

東京都渋谷区鉢山町15-5  
 郵便番号 一五〇  
 電話 〇三(三四九六)六六六六  
 FAX 〇三(三四七六)一〇四四  
 〇三(三七八〇)六三八五

印刷所 凸版印刷株式会社

© 1993 Academy Shuppan Inc.  
 ISBN4-900430-23-4

アカデミー出版社から  
すでに刊行されている  
シドニィ・シェルダン氏の作品

「明け方の夢」

(真夜中は別の顔・続編)

「血族」

「真夜中は別の顔」

「時間の砂」

「明日があるなら」

「ゲームの達人」



# 私は別人（下）

作・シドニィ・シエルダン

英意和訳・天馬龍行  
日本語文章・紀 泰隆



# BOOK TWO





## 第十八章

グレイハウンドの長距離バスは、終着地に着く頃は泥まみれになっている。オデッサ発、エルパソ、サンベルナルデイスノ經由、ロサンゼルス行きの一台が、バイン通りのハリウッド停留所に着いたのは、午前七時だった。

二日ばかり、二千四百キロの旅である。この過ぎ去った距離と時間のどこかに、ジョセフィン  
は過去を捨て、ジル・キャッスルに変身していた。外見上はいつに変わらぬジョセフィン・キジ

ンスキーだったが、内側は別人だった。あの、天使のような笑みは消え、固く閉ざした心は何かを喪失していた。彼女が心から笑うことはもうないだろう。

シッシーとデビッドの拳式の話聞いたあのとき、ジョセフィンは、もうこの街にはいられないと思った。彼女はブーツとなったまま、衣類と身の回りの品をスーツケースに放り込んだ。どこへ行くあてもなかったし、行った先で何をするかの見当もついていなかったが、そのときの彼女の頭の中は、ただこの場から逃げ出すことしか考えていなかった。

寝室を出たところで、壁に貼ってある映画スターの写真が彼女の目に留まった。これで自分の行く先は決まった。

それから二時間後、ジョセフィンはハリウッド行きのバスに乗っていた。バスはぐんぐんスピードを上げて、彼女を新しい運命の地に運んでいく。過ぎ去る窓の景色のように、彼女の心からオデッサとそこに住む人々の記憶がどんどん遠ざかっていった。ついでに自分の頭痛も置いていけたらとジョセフィンは思った。あの頭痛には本当に悩まされた。辛いときや苦しいときになると必ず襲ってくる。そのことで医者に診てもらったことはないが、やはり専門家に相談すべきだったのではないだろうか。でも、もうそんなことはどうでもいい。過ぎたことだ。そのうち、きっとよくなるだろう。いや、あの町を出たら、もう頭痛は起きないかもしれない。これからは、素晴らしい人生が送れるんだ。

ヘジョセフィン・キジンスキーは死んだんだわ。新生ジル・キャッスルよ、永遠なれ！

## 第十九章

父親認知訴訟、盲腸の破裂、米国大統領——似ても似つかぬこの三つの出来事が複雑に絡み合  
って、トビー・テンプルはいつきにスーパー・スターの座に躍り出た。

ワシントンの記者クラブが、毎年恒例の夕食会を開くことになった。

その夜の主賓は、米国大統領である。この夕食会には、ほかに副大統領、上院議員、閣僚、最高裁判所長官などが出席する予定で、数ある夕食会の中でも、最も格式の高いものである。だから、この会場に紛れ込むために、招待状を金で買ったたり、人から借りたり、あらゆる手段で手にする者も出てくる。

また、この夜の行事は、国際ニュースとして全世界に流されるから、総合司会者に選ばれる人間は大変な名誉を手にするのである。それだけに関係者は人選に苦慮する。

今年はアメリカのトップ・コメディアンが司会者に選ばれた。当のコメディアンは、出演を承諾してから一週間後に、父親認知の訴訟を起こされた。原告は十五歳の少女である。顧問弁護士のアドバイスによって、訴えられたコメディアンは休暇と称して、直ちに外国へ逃避した。

記者クラブの委員会は、やむなく二番目の候補を司会者に据えることにした。選ばれたのは、映画テレビでお馴染みの人気スターである。

彼は、夕食会の前の晩にワシントン入りしていた。次の日の午後、つまり夕食会の日のことであるが、彼のエージェントが委員会に電話してきて告げた。それによれば、司会予定の人気俳優は、いま病院で緊急手術を受けているところで、病名は盲腸破裂とのことだった。

夕食会まで、あと六時間しか残っていない。委員会は半狂乱になって、ナンバー・スリー候補を、リスト順に一人一人あたってみた。しかし、人気者たちは、映画やテレビのショーに出演が決まっているか、ワシントンに駆けつけるには遠過ぎるところにいた。候補者の名前はほとんど落ちてゆき、リストの終わり近くになって、ようやくトビー・テンブルの名前が現われた。

委員の一人は首を横に振った。

「確かに人気者だが、テンプルは、ナイトクラブ専門のコメディアンで、出し物に品がない。大統領の前に出すには、ちょっと——」

別の委員が発言した。

「出し物と言葉づかいに少し気をつけさせれば、合格じゃないのか？」

委員長が一同を見回しながら、結論した。

「トビー・テンプルが偉いのは、いまニューヨークにいて、一時間でここに来られるというところだ。夕食会は、なんといっても今夜なんですぞ、皆さん！」

かくして、記者クラブ恒例の夕食会、本年度の総合司会者にトビー・テンプルが選ばれたのである。

トビーは、大宴会場に集まった招待客たちを見回しながら思った。

「ヘスゲえ顔ぶれだ」

これだけ重要人物が揃っているんだから、トビーにとつては爆弾の落としがいがある。

「へ本物の爆弾だったら、米国の中枢機能は麻痺するぜ」

大統領は演壇の中央に座り、その後ろでは、五、六人のシークレット・サービスが目光らせている。

すべてがあわただしく準備されたために、トビーを大統領に紹介する労をとる者は、ついに誰も現われなかった。しかしトビーは、そんなことは気にしないことにした。

へどうせ大統領には、トビー・テンブルの名前を嫌と言うほど記憶させてやるよ

トビーは、夕食会準備委員長のダウニーが、うち合わせのときに言った言葉を思い出して、「あなたのユーモアには敬服してますよ。他人を攻撃するときに、またとりわけ面白いんですね。」とは言っても——」

委員長はそこまで言うてから、ゴクリと唾を飲み込んで、ひと息ついた。

「つまりですなあ——そのう——今日、集まっている人たちは非常に敏感なもので。ただ、誤解しないで下さいよ。我々をからかっちゃいけないと言ってるわけじゃありませんからね。一つ、忘れないで欲しいのは、今夜、宴会場で口から出た言葉は、ニュース・メディアを通じて、世界中に報道されるということです。ですから、我々としては当然、大統領や議員が中傷されるような発言は、いっさい歓迎しないわけです。まあ、端的に言うなら、うんとおかしいことを言つて、会場の人たちを笑わせていただきたいんですが、ここに集まった人たちを笑ひ者にしては欲しくないんです」

「わたしに任せて下さい」

そのときトビーは、そう言つて、にっこりした。

テーブルの上の食器がいつせいに片付けられていた。準備委員長のダウニーが、マイクの前に立った。

「大統領閣下、ご紹介いたします。今夜の総合司会者、我らの若き天才コメディアン、ミスター・トビー・テンブル！」

お定まりの拍手の中をトビーは立ち上がり、マイクロフォンの前に歩いて行つた。軽く咳払いをしてから、宴会場を見回し、それからおもむろに大統領の方に顔を向けた。

大統領は、素朴で気さくな人物だった。そもそも彼は、高級官僚や閣僚による外交を嫌い、全国民に向けて、こういう発言をしている。

「人と人との交流、民間外交こそ、いま我々が必要としているものなのです。コンピューターにばかり頼るのはもうやめて、我々の本能を再び信じようではありませんか。わたしが外国の指導者と語り合うときは、書類や統計をめくるのではなく、自分のズボンの尻をすり減らして交渉したいと思う」

この最後の演説文句「ズボンの尻をすり減らして」は、当時の流行語になったものである。トビーは大統領の方を向いて、いよいよ話し始めた。さすがにあがつていて、声が喉のところまでつかえている。

「大統領殿、今夜は、わたしにとってはスリル満点です。とにかく、あなたと同じ演壇に上がっているわけですから。大統領の椅子の座り心地というのは、柔らかいですか、硬いですか？ 世界を尻に敷いてるわけでしょ？」

会場がシーンとなった。トビーにとってショックなことに、それがしばらくのあいだ続いた。静けさをうち破って、突然、ケラケラと笑い声を立てたのは、大統領本人だった。つられて、



客たちがいつせいに笑い出し、割れるような拍手も起きた。これをきっかけに、トビーは調子よく話を進められた。例によって例の如く、彼は同席している上院議員たちを攻撃したかと思えば、最高裁判所を揶揄したり、報道機関をこき下ろしたりした。会場は大爆笑に包まれた。トビーがいくらかき下ろしても、彼が本気でそう言っていると受け止める人間はいない。同じ言葉でも、ほかの人間の口から出たら、大変な侮辱に聞こえるものを、この少年のような無邪気な顔で話されると、腹を抱えて笑えるから不思議だ。

その夜の宴席には外国の閣僚も招待されていた。トビーは、彼らにも顔を向けた。英語と外国語をチャンポンにした語りかけに、外国の大臣たちは、笑いながら盛んにうなずいていた。

トビーは、愚か者に徹しながら博識ぶりを示したかと思えば、他人を早口でののしりながら褒め上げる。一見、何を言っているか分からないのだが、客たちは笑わされて、分かったような気にさせられてしまう。トビーの司会が終わると、会場中が立ち上がって拍手した。大統領もわざわざトビーのところに来て、言った。

「いやあ、面白かった。本当に面白かった。今度の月曜日の夜にホワイト・ハウスでちよつとした夕食会があるんだけど、ご都合がよければ……」

翌日、あらゆる新聞がトビーの勝利について書き立てた。彼の言ったジョークが、仕事場や街のあちこちで聞かれた。とにかく、その場でホワイト・ハウスに招待されたのだから、それだけでも大センセーションなのである。

記者クラブの夕食会を境にして、彼は決定的に大物扱いされるようになった。世界中から、超